

後藤 茂

少年、少女の愛らしき口より、

われに詩集を編めとの請めいなみがたくて、

茲にわが幼き詩集『芳水詩集』はなりぬ。



わが心の 有本芳水

六興出版

後藤 茂

少年、少女の愛らしき口より、

われに詩集を編めとの請めいなみがたくて、
效にわが幼き詩集『芳水詩集』はなりぬ。



心が心の 日本芳水

六興出版

後 藤 茂 (ごとう・しげる)

1925年(大正14年)兵庫県相生市生れ。日刊「社会タイムス」記者、日本社会党中央本部機関紙編集局長等を経て、1976年(昭和51年)から衆議院議員。

(社)エネルギー情報工学会議理事

(財)日本郵趣協会理事

播磨半どんの会会員

著 書 『随筆集 ヴィオロンの音』

現住所 〒678 相生市青葉台5-13

わが心の有本芳水

平成4年2月20日 初版印刷
平成4年2月25日 初版発行

著 者 後 藤 茂

発 行 者 賀 来 壽 一

発 行 所 株式会社 六 興 出 版

東京都文京区水道二一九-二
郵便番号 一 二 二

電話 03(3943)3431
振替 東京 192448

印刷
製本 中央精版印刷株式会社

©1992 Shigeru Goto

落丁・乱丁の節はお取り替え致します。

ISBN4-8453-7187-1 C0095

I 詩のふる郷 7

二つの文学碑	7	詩情を育てた港町	13	われは旅人	15
控え目な人	17	父と母の詩	20	新しい詩歌の波に育つ	23
少年時代の「ふる郷」	25	薄田泣菫との出逢い	27		
吉備路と播磨の文学	31	新詩社に入る	34	『みだれ髪』の衝撃	36
血汐会除名	38	『白虹』に甦った友情	41	雛鶏守の詩人・内海信之	45
播磨青年文士相撲番附	48	『みかしほ』と『小鼓』	50		
刺激うけた露風の詩	53	『白百合』の創刊	57	先輩詩人・前田林外	60
『文庫』投稿時代	63	長詩「琴坂三味坂」	66	信之の反戦詩	70
吉備を去る日	73				

II

詩情漂泊

.....79

- 露風『夏姫』序 79 白虹同人詩集『青蘭集』 81
 泣菫の『二十五絃』 85 露風と共作『白鷺城回想の賦』 88
 観劇に酔う若き詩人たち 92 尾上柴舟の門に入る 96
 自然主義思潮の波 99 前田夕暮の『向日葵』 101
 河井醉茗編『青海波』 104 専門誌『詩人』創刊 107
 青春の浪漫「草月夜」 110 『文庫』時代の象徴詩 114
 師と仰いだ河井醉茗 117 芳水の口語自由詩 120
 伊良子清白の『漂泊』 123 ふる郷に送った「文芸雑感」 127
 若山牧水の「幾山河」 130 作家・水守亀之助 133 詩人・正富汪洋
 北原白秋の思い出 139 魅せられた逍遙の講義 142 抱月と樗牛 144
 社会へ出る日 146

III

少年詩誕生

.....151

- 『婦人世界』記者 151 『日本少年』編集長 154 鎮魂の叙事詩 157

IV

芳水巡礼

.....203

- 旅の詩を求めて 161 竹久夢二『どんたく』 164 扇雀と夢二 168
- 藤村にほめられた『芳水詩集』 171 五冊の詩集の装幀 178
- 第二詩集『旅人』 181 芳水の童謡 184 『現代日本詩選』 187
- 『抒情詩』の詩人たち 192 心の灯「飾磨の灯台」 196
- 大家たちの少年小説 199

- 飾磨のかち染め 203 桑名の芳水詩碑 207 中野重治『広重』から 211
- 稲垣足穂『明石』から 215 淡路の詩碑と青嵐句碑 218
- 池田亀鑑「抒情の花籠」から 222 西国三番「粉河寺」 224
- 『芳水詩集』に酔った文人たち 228 投稿少年たちの群像 231
- 子供の王国『日本少年』 233 校歌「都の西北」 237
- 詩碑建立の呼びかけ 240 飾磨の芳水詩碑 244 「少年詩」の評価 247
- 生きている明治・大正詩史 250 旧友・夢二に捧ぐ 253
- 吉備路の芳水詩碑 257 『落穂ひろい』と『梨の花』 261
- 芳水の筆跡 264 寂寥感をもった詩 269 詩人全集と少年詩 273
- 逝く日 276

有本芳水年譜

.....

281

あとがき

.....

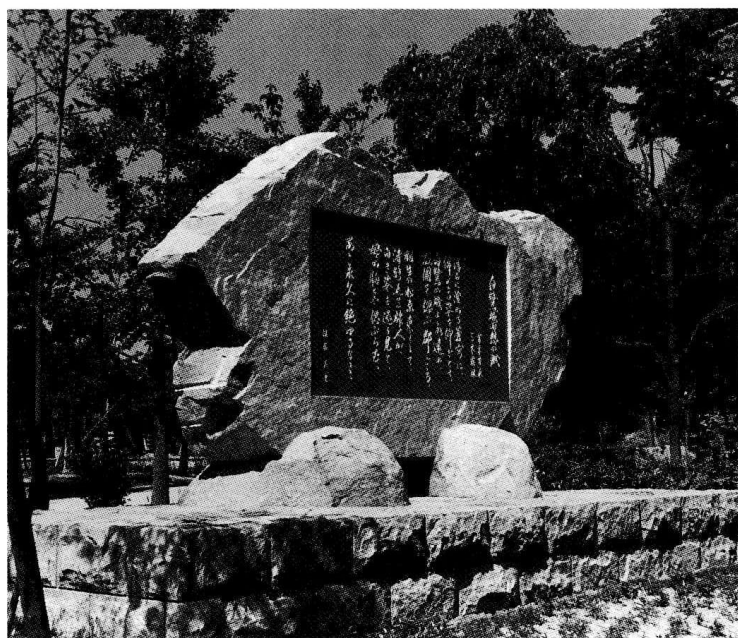
291

カバー・竹久夢二画『芳水詩集』から

表紙・姫路城内の詩碑『白鷺城回想の賦』（著者揮毫）から
見返し・井内利一画

装幀・村山 守

わが心の有本芳水



姫路城をのぞむシロトピア記念公園に建てられた
『白鷺城回想の賦』碑（後藤茂書）

I 詩のふる郷

二つの文学碑

入り江は、縄のように湾曲していた。

相生湾口東突端の金ヶ崎を「万葉の岬」と呼ぶようになったのは、いつのころからだろうか。

縄の浦に 塩焼くけぶり 夕されば

行き過ぎかねて 山にたなびく

日置少老 へきのを おゆ
(万葉集卷三・三五四)

縄の浦に生まれた私は、『万葉集』に詠まれた歌のなかでも、この歌がいちばん好きである。

初冬の休日は、おだやかであった。

私は、縄の浦（いまの相生市那波）の入り江を出て、野瀬、鰯浜と、車を、東へ走らせた。「万

葉の岬」は、鰯浜を上りつめたところにある。

岬に立つと、瀬戸の海が視界にひろがった。

——姫路の白鷺城の天守閣の上からでも、書写の御山の姫小松の隙からでも、八家の地藏堂の崖縁からでも、又は赤穂の岬からでも、凡そ播州一国の内なら、少し高い丘へ上れば、南海の青畳の上に、あの優しい島の姿が見えない所はないといっている。

谷崎潤一郎が『乱菊物語』に描いた風景が、そのままそこにあつた。

左手には淡路島が影絵のようにかすみ、右の方、赤穂の御崎から遠く小豆島が点在する。その向うは雲か、それとも阿波讃岐の山並みだろうか。眼の前に、『乱菊物語』の舞台、家島が浮かんでいた。

道は七曲りだ。山側には、ハゼの木が真紅に燃えている。鄙びた大浦を過ぎ、夢二と彦乃が遊んだ室津、さらに御津から網干をぬけて、芳水が生まれた飾磨へと急ぐ。

——播州の平野には、独特の抑揚があつた。

宮本百合子は、小説『播州平野』のなかで、網走刑務所を出た夫重吉に会うため、「秋の午後、思いもかけない播州平野の周辺を、荷馬車にのつて、かたりことりと東へ向つて道中する」ひろ子に、こんな描写をさせている。

いまは、はげしい勢いで都市化する播州平野に、「独特の抑揚」を感じることも少なくなつたが、それでも、古い家のたたずまいや、掘割を見つけて、ふと心のなごむことがある。

飾磨は、郷愁をいだかせる町だ。

思案橋で車をとめた。

風吹けば波か立たむとさもらひに

都太^{っだ}の細江に浦隠りをり

橋ぎわに建てられた山部赤人の歌碑を見るのは、久しぶりであった。歌人尾上柴舟の筆あとを追いつながら、万葉の昔に思いをはせていたが、他に訪ねてくる人はなかった。

赤人のうたった細江は、現在の姫路市飾磨区細江である。旅人が風の静まるのを待つ、よき入り江であった。

思案橋を過ぎて港の方へ曲ると、すぐ右側に浜の宮が見える。クヌギの枯葉も散って、境内は静寂であつた。落葉が、かきこそと鳴つた。

社前には、石造りの霊牛がおかれていた。越前や加賀の北前船主が奉納したもので、飾磨津が北前船の寄港地であつたことを物語っていると、由来記に誌してあつた。

あわい陽がこぼれていた。西南の隅に目をやると、灯台をかたどつた歌碑が建っている。

いにしえは松原つつく浜辺にて

宮の燈明も沖を照らしき

読入不知

私は、この歌碑に強い興味をもった。芳水の詩碑も、同じ灯台を模していたからである。

浜国道をはさんで、東に歩くと、ものの十分とはかからないところに、恵美酒の宮がある。浜の宮とともに、菅原道真公をまつる飾磨の氏神である。

船場川と野田川を結ぶ宮堀川が、恵美酒の宮の前で入り江になっていた。その広前に建てられた芳水詩碑を訪ねるのは、幾度になるだろうか。

播磨は われの父の国

播磨は われの母の国

飾磨の海に ともる灯の

その色見れば 泪ながるる

芳水と私とは、生きた時代が違う。しかし、生まれた家はわずかに五里、二十キロほどの道のりで、播磨の海でつながっていると思うと、胸がうずいた。

——与謝野晶子さんは

海恋し潮の海鳴りかそへては

少女となりし父母の家

と歌い、海の遠鳴りに郷愁をよせているが、私もまた晶子さんと同じように、海の遠鳴りに郷愁をよせるのであった。（『わが心の自叙伝』）

と語る芳水。飾磨の海の潮騒がきこえてくるような、ひとときであった。

詩碑の建設を呼びかけたのは、いまは亡き高橋秀吉であった。大きさは違うが、同じ形の文学碑が、同じ昭和四十一年に建てられた。そのいきさつを、たつ子夫人に尋ねてみた。

「高橋はね、詩碑には苦心していました。浜の宮にあるのがそれです。読人知らずですか、ええ、高橋の作ですよ。自分の名を刻むのが、照れくさかったんでしょうよ」

二つの文学碑には、高橋秀吉の思いが、秘められていたのである。

碑文を染めた紺の風呂敷を頂戴して玄関を出ると、ついいましたがたまで明かるかった空が、黄昏色に変わっていた。

帰路、車窓に見えかくれする播磨の海は、淡い月の光に、小さくかがやいていた。

私は、芳水の詩「播磨灘」（『芳水詩集』所収）を口ずさんだ。

瀬戸の^{うちうみ}内海播磨灘

広重のごと色^さ冴えて

紺と銀との夕暮は

海の上よりせまり来ぬ。

やあれ帆をまけ船を出せ。

月ほのめきぬ^{むら}室の町

旅の女や商人^{あきんど}は

船宿指して集りぬ。

格子こうしづくりの家の

中より洩るる赤き灯を

そがひになして荷をつくる

船の男は年若く。

船出待つ間のつれづれを

阿波あわに行くてふ旅僧は

行季こうりの上になつて

旅物語かたるかな。

南無象頭山なむざうづさん讃岐なる

金比羅権現わが旅を

守らせ給へと手を合せ

祈るもうれし旅の身は。

四方山よもやまがたり国なまり

かくて船出は近づきぬ

赤き脚絆はばきの巡礼は

灯ほかげに涙さしぐみて。

船頭せんど可愛や播磨の沖で

一丈五尺の櫓がしわる

船は出いでたり初秋の

月うつくしき夜の海。

船唄もよし夜もよし

柱のもとにかがまりて

港かたの方を眺むれば

白壁の色ただ白し。

やあれやれやれ船は行く

帆のざんざめき夜は更ふけぬ

かくて旅衆たびしゆは一やうに

眼まなこを閉ぢて眠りぬる。

海は凧いでいた。

私は芳水をたずねる文学の旅を、ふる郷播磨の海からはじめたのであった。

詩情を育てた港町

有本芳水は、明治十九年（一八八六）三月三日、飾磨の玉地で生まれた。名は歆之助といい、昭和五十一年一月二十一日、八十九歳でこの世を去っている。

生家は、もとは造り酒屋、「老松」と名づけた酒を造っていたが、後には港町にふさわしく回船業を営んだ。

「百石ないし二百石の和船を所有、播州平野から産する播州米や、但馬たじまの山から伐り出した木材を、播但鉄道で飾磨に運び、これを船につんで、大阪、兵庫に運送するのであった。湛保たんぽから入り江があつて、家の前まで続き、浪速丸、伊勢丸、明德丸などと名をつけた船がつながれていた」と、家運隆盛の當時を、芳水は『わが心の自叙伝』（のじぎく文庫）で偲んでいる。

芳水に「浜の家」（『芳水詩集』）という詩がある。

日も暮れ果てた浜の家

遠くで浪の音がする

窓の内から港を見れば

北前船や帆前船

錨を上げる帆を下す
若き船頭の唄の声。

こうした港のにぎわいは、芳水の幼い心をおどらせ、祭りというと血をたぎらせる、あの威勢のいい浜筋氣質を育てていった。

ある年の秋祭りに、恵美酒の宮に宮入りする屋台の、太鼓たたき役にえらばれた芳水少年は、「この大役に誇りを感じ、腕のかぎり、力の限り太鼓をたたいた」。

祭りによせた芳水の喜びは、たて糸となり、港や海への郷愁はよこ糸となって、詩の抒情を、美しく、哀しく織りなす。飾磨の湛保は、芳水詩の揺籃ゆりかごとなったのである。

芳水より三年あとの明治二十二年三月一日、姫路の北部の農村、仁豊野にぶのに生まれた哲学者の和辻哲郎にも、湛保は、強い印象をのこしたようだ。

——湛保というのは昔の舟附場で、一辺が一町と一町余の長方形の入江になっており、岸は石でたたんであった。そうしてその北側と西側とに茶屋だか遊女屋だかが建ち並んでいた。

そこを通りぬけると、南側は松の木の間並んだ広場になっていて、その崖下に遠浅の海が広がっていた。（和辻哲郎『自叙伝の試み』）

和辻哲郎が姫路中学三年のとき、観海流の水泳教練のため、飾磨の級友の家に合宿した当時の光景であるが、この頃、芳水はすでに飾磨を離れていて、二人の出会いはなかった。

芳水の思い出は、和辻とは対照的である。